

24. 佐久間 庸和氏（株式会社サンレー 代表取締役社長）

「高齢者が多いことをポテンシャルと捉えて、コンパッション都市を目指してほしい」



佐久間 庸和（さくま つねかず）

北九州市出身。

早稲田大学政治経済学部卒業後、サンレー入社、専務取締役等を経て 2001 年に代表取締役社長就任。

2014 年 全国冠婚葬祭互助会連盟会長就任

九州国際大学客員教授就任

2018 年 上智大学グリーンケア研究所客員教授就任

「高齢化を捉え直し再び豊かな街へ」

昨年は北九州市市政 60 周年でしたが、わたし自身も昨年、還暦を迎えました。北九州市と同一年なのです。北九州市は、全国の政令指定都市の中でもっとも高齢化が進んでいます。世界一の高齢化率であることを考えると、北九州市は世界一高齢化が進んだ街と言えるでしょう。人口が 100 万人を切ったことから、北九州市の衰退が叫ばれています。しかし、わたしはつねづね、「高齢者が多いことは北九州の強み。それを悪いことと思いついてきたことが意気消沈してきた原因」だと感じています。

かつて筑豊は炭鉱で日本中を豊かにし、八幡は製鉄で日本中を豊かにしました。もう一度、北九州が全国に「豊かさ」を発信できれば、それは「老いの豊かさ」であると確信します。わたしはこの北九州こそ、老いるほど豊かになる「老福都市」が実現できると考えています。

つまり、これまでに北九州市の「弱み」とされてきたものを「強み」ととらえ直して、まったく新しい都市モデルを示すべきであると考えます。まさに「老い」がそうです。北九州市は日本一の高齢化都市ですので、全国の独居老人にどんどん移住してもらい、高齢者の楽園にすればよい。つまり、高齢者福祉特区を作って、日本一、高齢者が住みやすい街を作るのです。

日本には独居老人が約 600 万人いるといえます。僻地で生活しながら不安な思いをしている人も、皆同じところに集まったら良いと考えます。国にも財政支援をいただいて、租界のように、安全を確保しながら北九州市に来ていただく、600 万人の 1 割が来たら 60 万人で、人口 100 万人達成はすぐにできると考えています。

「文化、医療、子育て等様々な魅力がある」

北九州市は前代未聞の 5 市対等合併により誕生したため、それまでの 5 市ごとにしっかりと社会資本が形成されていて、現在にもつながっています。

例えば、人口 10 万人当たりの医療機関の数では政令市の中で病院数が 3 位、診療所が 4 位、病床数は病院、診療所ともに 2 位と充実している他、救急車を要請して病院に到着するまでの時間は一番早いです。また保育体制もしっかり確立されており、待機児童数は 10 年以上 0 が続いてきました。このような点が「住みたい都市」として高い人気を得ている要因でしょう。

また、北九州市は災害が少ない場所だとつくづく思います。台風が来ると言っても直撃はしませんし、地震も大きなものではありません。1901 年に八幡製鉄所をその場所に作ったのは、日本で一番安全なところはどこかと調べた結

果なのでしょう。あと、意外に知られていませんが、北九州市は人口1人あたりの映画館数が日本一です。これからの超高齢社会で、市民の暮らしやすさや住みやすさを考えるうえで大きな魅力となるでしょう。

「住みたい都市」として人気が高まる一方で「修羅の国」というイメージがあるのも事実です。幕末期、小倉は小笠原藩が統治しており、その時に根付いたのが小笠原礼法です。その基本は「つつしみ、うやまい、思いやり」です。わたしは小倉高校卒ですが、「質実剛健」を是としていました。その意味で、修羅の国のシンボルとして発信されている、(一部の方々の)派手な成人式衣裳のイメージは小倉より博多(商人のまち)に合うのではないのでしょうか。北九州においては、あくまでも思いやり(コンパッション)をカタチに示すということが大事だと考えています。

「若年層が残りたくなる企業の誘致・育成を」

若年層に目を向けると四年制大学が10もあり、人口比での学生数はかなり高いのに、大学卒業と共に多くが北九州市を去っています。受け皿になる企業が少ないからです。大企業でなくても、魅力ある中小企業があれば、若者の働き方への考えが変化している中で、学生を引き留められるのではないのでしょうか。北九州市にも企業への誘致や企業育成への努力が求められています。

「つながりづくりによる生きがい創出」

衣食住が揃うと、次に生きがいが必要です。いくら長生きしても、死ぬことが怖かったら良くありません。老いを豊かに生きるためには仲間が必要です。血縁も地縁も薄くなる中、新たな「縁づくり」が欠かせません。わが社では温浴施設「日王の湯」(ひのうのゆ)を運営しています。ここでは毎日訪れる地域の方々や、子ども温泉、子ども食堂等を通じた湯縁(ゆえん)

を提供しています。また主催する囲碁大会では「碁縁(ごえん)」を、俳句コンクールでは「句縁(くえん)」を。映画イベントにおいては「映縁(えいえん)」を提供しています。新たに愛する人を亡くした方々が、集い語り合う場を提供し「悲縁(ひえん)」を共有する場になっています。本業である冠婚葬祭互助会は元来「相互扶助」をコンセプトにしています。「利他の精神」をもち、多彩な縁を巡らせることで、豊かな老後を過ごせるまちづくりができればと思っています。

「コンパッションを重視した街づくり」

日本一の高齢化都市であることに加え、ホームレス支援やシングルマザー家庭支援も北九州の特徴です。

わたしは、全国で困っている人がいたら、みんな「北九州へ行こう!」を合言葉にしてもらえばいい。死別の悲嘆に暮れている方々も、グリーンケア都市としての北九州にあればいい。北九州市がその「強み」を生かせば、世界の都市になれると本気で思っています。その未来像は「コンパッション都市」です。これは老い、病、死、喪失を受けとめ、支え合うコミュニティのことです。まさに、北九州市が目指すべき都市像だと考えます。わが社では、自死の要因として、配偶者の死があるケースも多いため、ご遺族の立ち直りを支援するグリーンケアを推進してきました。またNPO法人を設け、地域の独居高齢者らが集う「隣人祭り」を開き、孤独死防止を図ってきました。すべては、コンパッションに基づいた企業活動です。高齢者特区にして、孤独死しない隣人都市を作り、全国から独居老人が北九州に集まってくれば人口も増えます。さらに、困窮者やシングルマザー支援も充実させ、「困ったら北九州に行ってみよう」という街にする。そうすれば、北九州市は世界のコンパッション都市となるでしょう。ぜひ、北九州を「コンパッション都市」に!

25. 佐々木 紀彦氏 (PIVOT 株式会社 代表取締役社長 CEO)

「北九州市には、「いろいろなものを受け入れて、新しいチャレンジをしていくまち」

であってほしい。」



佐々木 紀彦 (ささき のりひこ)
北九州市アドバイザー。北九州市出身。
慶應義塾大学総合政策学部卒業。
スタンフォード大学大学院修了。
東洋経済新報社に入社。東洋経済オンライン編集
長を経て、ユーザベース社に転職し、NewsPicks 創
刊編集長、NewsPicks Studio 社長などを歴任。
2021 年 6 月にビジネス動画メディアを手がける
「PIVOT」を創業し、代表取締役社長 CEO に。

「良い意味で「雑多」で「ワイルド」

北九州市は、昔からアジアの玄関口として、多様な人々がやってきた土地です。私の祖父も、鹿児島から医師として北九州に移住してきましたが、過去からずっと住んでいる人だけではなく、様々な人が新たに入ってきている土地であると言えます。また、国内だけではなく、アジアからも人が来ており、まさに「人の増殖」だと言えます。

北九州市をそれで表すと、良い意味で「雑多」で「ワイルド」だと思います。様々な背景を持つ人が雑多に混ざり合うことで、ワイルドな活力やエネルギーが生じている。それが北九州市の良さであり、そのような地域特性を今後も維持していくことが望ましいと思います。

「ポテンシャルの「見せ方」をどうするか

北九州市の最大のポテンシャルは、ロボット産業やグリーン産業で、グローバルに通用する企業があることです。また、産業が発展している中でも、自然が近くて暮らしやすいことも、大きな魅力の一つでしょう。

ポテンシャルや魅力についてのアイデアは、おそらく出尽くしているのではないでしょう

か。むしろ、それらのポテンシャルをどのような見せ方で発信していくかを検討することが求められます。数多ある魅力の中でも、特にインパクトが大きいものに絞って、「これが北九州市の魅力だ！」と見せていくことが非常に重要です。

特に、今の時代は、目立つ人がいて、その人の発信によって物事を認識することが多くなっています。したがって、抽象的な魅力ではなく、特定の人物やプロジェクトなど、具体的なものを見せていくことがキーになってくるのではないのでしょうか。「魅力の語り部」と言ってもいいかもしれませんが、象徴となる存在をつくり、そこを通して魅力を表現することが求められます。

そのような意味では、一つでもいいから、「北九州といえば〇〇」というものが、全国的に認知されることが望ましいでしょう。誰もが共通で思いつくものでもよいですし、例えばエンジニアなら「北九州といえば榊安川電機」など、特定の領域ごとにあってもよいと思います。

「課題を真っ先に解決する都市」

日本は課題先進国と言われていますが、その

日本の中でも、課題を真っ先に解決していく都市というのが目指す方向でしょう。北九州市は、100万人近い人口規模があり、様々なことに挑戦しやすいポジションにあります。例えば特区を活用するなど、大都市だからこそ課題を解決できる基盤もあります。

その中で、「テクノロジーを生かした実験が行われているまち」という、非常にポジティブなイメージを与えることができます。

例えば、高齢化に伴い、タクシー運転手の確保が難しくなっていることが課題の一つになっており、ライドシェア活用の検討も進んでいますが、北九州市はトライするのにちょうどよいまちの規模です。サンフランシスコではタクシーの自動運転が始まっていますが、北九州市でも、過疎エリアでトライアルができるのではないのでしょうか。

また、ロボット産業は、「日本の最先端」による課題解決の象徴になり得ると思います。無人化など、人口減少を逆手に取ってアピールができる分野です。グリーン産業でも、洋上風力発電等をもっとアピールしていくべきでしょう。

それ以外では、福岡市を「てこ」としつつ、北九州市との違いを明確にすることによって、福岡市に来る人を北九州市にも誘導するなど、近隣都市の存在をうまく活用した魅力の発信ができればよいと思います。福岡市の主要な産業はサービス業ですが、北九州市ではものづくりであるなど、様々な面で差異があるので、福岡市をベンチマークとして、北九州市の魅力を差異化することも考えられます。そのような意味で、福岡市は、良き味方にも、良きライバルにもなり得るでしょう。

「新しいことに率先して取り組む」

北九州市には、「いろいろなものを受け入れて、新しいチャレンジをしていくまち」であってほしい、これが率直な思いです。

北九州市を表す際に、「ワイルド」という言葉を使いましたが、そこには、雑多な人々が集まっているというだけではなく、「新しいことに率先して取り組む」という意味合いも含まれています。北九州には、新しいことに前向きで、細かいことをうるさく言わず、いろんなことを試してみようという、良い意味でのラフさがあります。

「失敗してもいいのでやってみよう」という雰囲気があり、いろんなことが試せるまちなら、若い人や起業家精神のある人が集まってくるのではないのでしょうか。

また、武内市長は英語教育にも力を入れておられますが、多様な人々が来るアジアの玄関口という、昔からあるポテンシャルを生かす上で、国内外からの移住者も見込めます。国際的な都市になり、多様な人材が集まれば、産業を支える人材が獲得でき、産業振興にもつながるでしょう。

それに向け、自身も地元のできる限り貢献したいと考えています。

26. 佐藤 崇史氏（株式会社資さん 代表取締役社長）

「人を中心に、人と人が手を携えて一緒に発展していくまちに。」



佐藤 崇史（さとう たかふみ）

広島県出身。1997年慶應義塾大学環境情報学部を卒業後、ソニー株式会社、ボストン・コンサルティング・グループ（BCG）を経て、2006年株式会社ファーストリテイリングに転じ、経営変革・グループ戦略・人事・店舗運営・社長室等の責任者を歴任。経営変革を推し進めた。2018年3月より株式会社資さんの代表取締役社長に就任し、第二創業期を牽引。現在に至る。

「北九州市は思いや愛情にあふれている」

北九州市の皆さんは、思いや愛情にあふれています。当社は北九州市で生まれ、北九州市に育てていただきました。北九州市出身の従業員も多く、U・Iターンの受け皿にもなっています。そのため、北九州市の発展に貢献したいという思いを持っている者が多いのです。

2018年に東京で開催された北九州市の魅力発信イベント「KitaQ フェス」に出店した際、北九州市出身者やゆかりのある方々が首都圏全体から集まってくださいました。また、関西圏へ店舗を出店するにあたり、2023年8月～9月にかけて、2週間ほど阪神百貨店・梅田本店に催事出店しましたが、オープン前から100人以上が並び、2時間待ちになりました。これも北九州をはじめとした、九州出身の皆さまが、ご来場くださり、クチコミを広げてくださった賜物だと思います。当社の強みはたくさん「資さんファン」のお客さまたちに支えられていることです。北九州市在住の方も、外に出られた方も、「資さん」を盛り上げようとしてくださっているのが伝わります。

「多様な人を受け入れ、協力できるまち」

私が社長として着任したのは約6年前です。北九州市の人たちは他県出身者である私を温かく迎えてくださいました。官営八幡製鐵所の時代から、外から来た人と一緒に力をあわせ発

展させていこうという土壌が、現在も受け継がれている部分があるのでしょうか。

当社も、北九州の人間だけで、ということは全くなく、もともと資さんで働いていたメンバーと、私のように途中で仲間になったメンバーが混在しており、みんなで力を合わせていこうという雰囲気があります。一緒に盛り上げていこうという文化が、明治維新のころから根付いているのではないのでしょうか。

商人のまちであった福岡市のうどんは柔らかいですが、当社のうどんは表面はやわらかく、中はもちもちとした食感が特徴の食べ応えのある麺です。重工業が栄えた、かつての北九州市の工場等で肉体労働をされる方がお客さまの中に多く、お客さまの声を聞きながら、好みにあわせて改良し開発したものです。ぼた餅もその当時、屋台で提供していたという、北九州市独特の食文化を踏襲したもので、うどんに合う様に甘さ控えめにしています。食は地域の文化や人と深く結びついています。北九州市で育まれた食文化は北九州市を体現していて、様々な人を受け入れる北九州市で育っている味だからこそ、「資さんうどん」も様々な土地で受け入れられているのだと思います。

「環境・文化的に住みやすいまち」

北九州市は住みやすいまちだと思います。インフラが整っていて、それぞれの地域に核があ

ります。日本各地で中心部と過疎地域の差が開くという状況が多くみられる中、7区それぞれにインフラが整っているのは珍しいですし、強みだと感じています。また、子どもを育てる環境も充実しています。子育て交流プラザ（元気の森）やグリーンパーク、プールなど、子どもたちがのびのびと遊べる環境があり、そこも大きな魅力の1つです。

そして、食事がおいしい。当社の他にも、おいしい個店のうどん屋もありますしラーメン店や韓国料理、中華料理等、多様なジャンルのお店があります。また、豊富な魚介類、農産物（タケノコ、トマトなど）もあり、本当に食資源が豊かなまちだと思います。人のベースは衣食住ですが、特に食について強みがあるまちなのではないでしょうか。

「魅力を伝えれば支持が集まるはず」

広報面で本当にありがたいと感じるのは、芸能人やスポーツ選手などの影響力のある方々が自然発生的に「資さんうどん」を宣伝してくださる点です。例えば、声優業界では「資さんファン」を公言してくださっている方が多く、それをきっかけに食べに来てくださる方がいます。非常にありがたく「魅力を伝えていく」ということの重要性を感じます。

北九州市には、まだ世に出てないアピールポイントが沢山あると感じます。より積極的に魅力を発信していくことで注目が集まるのではないのでしょうか。

「先進的な取組に開放的なまち」

北九州市は先進的な取組に寛容であると思います。世間的な認知はこれからかもしれませんが、先進的なDXの取組みをしている企業も多いです。ベンチャー企業も集まってきており、勢いのある企業が多いです。やはりそれも、多様性を受け入れる北九州の風土が関係しているのだと思います。未来に向けたパワーが、

今生まれつつあるのではないのでしょうか。

「福岡市とともに九州のツートップに」

また、北九州市は地政学的なメリットが大きい場所に所在しています。九州全体にも、本州にもアクセスが良く、アジアにも近いです。北九州空港を拠点に人の交流がより活発になれば、さらに発展の可能性があると思います。九州全体が日本の1/10経済圏だと言われていますが、北九州市には福岡市と同等以上にハブになれるポテンシャルがありますし、それぞれの良さを活かしてツートップになれば良いと考えます。北九州市には、事業の中で日本、世界全体の視点で考える企業が多いと感じます。そういった企業が手を携え取り組んでいくことが、北九州市がさらなる進化を遂げるためのポイントだと思います。

「人を中心に、協力して発展するまちへ」

今後企業を発展させていくうえで大事なものは、やはり「人」だと思います。新しい考え方を受け入れ、協力していく姿勢が重要です。個々の多様性をお互いに認め合い、共に尊敬し合いながら仕事に取り組める環境を作りたいです。それは社内だけではなく、同じ北九州市の企業同士でも、連携を図りながら様々なコラボレーションしていくことができれば面白いですね。

新しい技術の活用に走るあまり、無機質で単純に便利に向かって進んで行くことは北九州市らしくないと思います。心が通うこと、助け合うことが重要ですし、住んでいる人たちの良さが生かしながら、進化をしていくことが大切です。北九州市は、「人」を中心に、手と手を携えて一緒に発展していくまちを目指すべきであると考えます。その同じベクトルにみんなが向かえば北九州市がさらに発展するのではないのでしょうか。

27. 柴野 雅人氏（北九州市立大学）

『ここぞ』というときの市民力が強いまちに。これまで培ってきた市民力は大きなレガシー。」



柴野 雅人（しばのまさと）

北九州市八幡西区出身。

北九州市立大学 地域創生学群 4年。

大学 2年時に自治会・町内会活動の盛り上げを目指す『学生団体あわいのひと』を立ち上げ。

大学 3年時から、北九州市の若者ネットワーク『Kitakyu U29(キタキューユニーク)』に所属。

現在も若者目線のまちの課題解決に奮闘中。

「これまで培ってきた『市民力』は大きなレガシー」

北九州市が過去から引き継いでいくべき一番のレガシーは市民力です。北九州市誕生以来60年の歴史の中で、公害の克服、到津の森の復活、発祥の焼うどん文化の継承、北九州市民劇場、そして根底にある市民の自治意識は大きな魅力です。行政に丸投げしない姿勢が市民力につながっていると考えています。

「活かすべきポテンシャルは豊富」

市民力を筆頭に、北九州市は色々なポテンシャルを持っていると思います。先日、門司港周辺をめぐりましたが、一つ一つの施設の充実度がとても高いと感じたところです。一例をあげると「門司港レトロ展望台」。楽しいだけでなく学びの展示もしっかりとあります。

一方、建物の内部やエリアのいす・テーブルのレイアウトなど、ちょっとしたところがアップデートされてない印象を受けます。その辺りが、東京や福岡市と比べると「惜しい」と思うところです。展望台に限らず、広いスペースの一部をコワーキングスペースにするなど、既存の施設の見せ方については、アナログ、デジタル両面で工夫ができると考えます。

また、皿倉山の夜景はとても好きです。子どもころも行きましたが、大人になって改めて見ると「すごい」と感じます。ソフト面で

も、夏季にビアガーデンはありますが、今後は、例えば山頂でのアクティビティの実施など、季節を問わず長居できるような過ごし方、食以外でも観光客を滞留させるコンテンツも考えていく必要があるのではないのでしょうか。

「北九州市民の内発的イメージの向上を」

北九州市の人は普段はとてもシャイだと感じますが、飲むとワーツとしゃべる、という気質だと思います。世間的なイメージとして「修羅の国」などと言われ、良いまちなのに、「良いと言っはいけないのでは?」、という雰囲気があり、そのバイアスはとても惜しい気がします。いわゆる「北九州いじり」が続いている状況ですが、実際は、成人式の派手な格好がニューヨークで評価されていたりしているので、まずは市民（若者）の個人単位での発信からポジティブなものにすることで、内発的なイメージが良くなっていくのではないのでしょうか。

「北九州市のオリジナリティを大切に」

私は、来年、就職のために東京に出る予定で、正確には未だ社会人として北九州市のまちを見ることはできていないのですが、福岡市とライバルで競う必要はないのではないと感じています。すでに1カ月の間、東京でインターンを経験してきましたが、北九州市の住みやすさ

は圧倒的です。元気の森、こどもの館、皿倉山、平尾台などなど、ここで遊び、学びながら過ごせたことは自分の人生の財産として、数字では測れないものが得られました。

したがって、それぞれが唯一無二の都市として、北九州市は北九州市独自の良さを持っているので、暮らしやすさや自然と都会の程よいコンパクトさなど、オリジナルな魅力を大切にしたいと思います。

「起業や移住のロールモデルをつくる」

私は、いったん就職で東京に行きますが、「いつか必ず北九州市に帰る」、とすでに会社に伝えています。ゆえに、スタートアップ支援は是非とも継続して欲しいと願っています。この分野の支援については、九州の中でも手厚いのではないのでしょうか。起業や移住をされた方のロールモデルを増やし、雇用をつくり、数値で実績を示していく、どこまで数字で結果を出していけるか、ということが重要だと思います。

その他には、高齢化率が高くなる中で、福祉に従事する若者を大切にしたいと感じます。春から社会福祉士になる友人がいるのですが、話していると多くの課題があることが分かりました。仕事内容は大変で、時間的拘束も長く、かつ給料も安い。これでは家庭を持つことができないと思われてしまいます。

しかし、北九州市ならしっかり稼いで暮らしていける、という方向に持っていければ、きっと良くなるのではないかと感じています。勤務時間や役割分担を工夫することで、若くして福祉業界に入っても、家庭を持ち、子育てなどと両立しながらやっていけるよ、と言えるまちになって欲しいと思います。

「ここぞというときの市民力が強いまちに」

北九州市には、「ここぞというときの市民力が強いまち」であって欲しいと思います。現在、私は自治会を盛り上げる活動をしています、

ご近所単位の自治の力はすごく大切だと感じます。「自分たちの地域は自分たちでよくする」という意識付けが重要で、それが広がりこそがまさに都市を形成しているのだと思います。

「ここぞ」という言葉を使いましたが、北九州市民は日ごろはちょっと消極的でネガティブな反応をしてしまっているのでは？と感じます。しかし、心の奥底は燃えているのが北九州市民。それが「ここぞ」で発揮されたら良いと思うのです。さらに言えば、そのような想いを20・30代が発信に変えていけるような場ができれば、想いが形になると思います。

そのような想いが発揮される場においては、意識の高い学生だけが集まるだけでなく、常に風通しのよい状態で、デジタルやアナログの面でも活用されるような形になれば良いですね。様々な市民の声が拾え、反映される、ということが常にアップデートされ続けるまちであってほしいと思います。

28. 嶋田 瑞生氏（株式会社 ATOMica 代表取締役 Co-CEO）

「市民や事業者に寄り添い、カメレオンのように合わせてくれるまち。」



嶋田 瑞生（しまだ みずき）

仙台市出身。東北大学で加齢経済学を学ぶ傍ら、大学1年次にゲーミフィケーションの分野で学生起業。会社経営を通じて様々な大人と出会い、共創が起きていく面白さに気づく。その後、都内メガベンチャーにエンジニアとして就職後、2019年に（株）ATOMicaを宮崎で創業。その後2021年に北九州に拠点開設後、創業5年で全国30弱の街で事業展開を進め、累計資金調達額は10億円を越える。

「北九州出身ではないからこそ見える良さ」

私は22歳まで仙台に住んでいて、その後、北九州市を含めて様々なまちで仕事をしてきました。そこで感じるのは、「自分の街の魅力は、意外と気付けない」ということです。

北九州市は、八幡製鉄所を起点に世界を見渡しても有数の都市として名を轟かせた歴史を持っています。4年前、そんな北九州市の歴史を知っていた私はワクワクしながら初めて北九州訪問をしたのですが、北九州市で会う人が皆、ご謙遜も含めつつやや自虐的に「あんまり名物も無いのよ」とよく仰っていました。

しかし、北九州で過ごす時間が増えるにつれて「実はこれが良くてね」と食・自然・産業など沢山の素晴らしいコンテンツを教えていただくなかで、どんどん魅力を知っていきました。

特に八幡製鉄所の歴史や九州工業大学の歴史など、話を聞くととても面白く、興味深いものです。松林を切り開いて、日本の近代化をけん引する製鉄所の建設により、産業が集積する一方で、公害も経験し、市民活動をきっかけに克服し、今や環境先進都市となったストーリーは非常に特異だと思います。これはSDGsの親和性も非常に高く、こうしたユニークなコンテンツ、歴史があるのに、それが世の中にまだま

だ浸透していないのはとても惜しいと感じています。知れば知るほど面白い、それが北九州です。

「県庁所在地でない100万都市という面白さ」

私が育った仙台は、北九州市とほぼ同じ人口規模で東北最大の街です。一方、北九州も100万弱の人口があるにも関わらず、人口規模だけで測れば福岡市より少なく、九州最大の街ではありません。このギャップが個人的には面白いのです。近くに福岡市という良い好敵手がいることによって、100万弱の都市規模という強さと、「追いつけ追い越せ」のハングリー精神を両立しています。

「市職員の『暑苦しさ』、外を受け入れる気質」

企業誘致や創業支援に対する行政、つまり市役所のコミットメント度合いの高さには驚いています。各所でこの言い回しをさせていただいていますが、良い意味で市の職員が「暑苦しい」のです。各地で市役所職員の方々とお仕事をさせていただきますが、全国トップクラスに熱量の高いと感じます。

また、このまちの人は、受け入れてくれる気質をすごく感じます。当社は、宮崎で創業した会社ですが、2拠点目を北九州に進出し大きな

飛躍のきっかけを頂いたので、「宮崎生まれ、北九州育ちのスタートアップ」だと自認しています。当社のステークホルダーも皆「北九州市に進出したのは良い判断だった」と言ってくれているのが、そのことを物語っています。

「程よく都会、程よく地方。都会と田舎をつなぐ橋渡しの街」

地域の魅力発信をするにあたり、「●●するなら北九州」の「●●」を何にするかが大切だと考えます。私は北九州には「都会に出るなら北九州」「地方に行くなら北九州」という一見矛盾した2つのキャッチコピーをつけることができると思っています。

例えば東京のベンチャー企業が東名阪以外のマーケットに進出をしようと考えたとき、いきなり人口数万人の街を手掛けてしまうとそのギャップへの調整が難しいことは想像に易いですが、100万弱の人口を持ちながら県庁所在地ではないという面白い立ち位置の北九州であれば、都会の文脈をそこまで変えないまま地方都市への調整の練習ができると考えます。

逆に、九州エリアの会社が地場から更にマーケットを広げて大都市圏を狙っていきこうとなったとき、最初から超レッドオーシャンの東京に勝負を挑んでしまうことはその調整難易度から大きなりスクがありますが、これまた絶妙な立ち位置の北九州であれば大都市でのビジネス実践経験を積めるものの東京都比べた際にはそこまでレッドオーシャンではないという美味しい所取りが可能であると考えます。

こうした両者にとって挑戦しやすく、そして熱狂的な支援者である市役所職員の皆さまが多い北九州はまさに挑戦の場としてとてもやりやすい土地だと思います。

「頼られるのが上手いカメレオン都市」

市外企業から見て、北九州市は相対的に使い

勝手が良いまち、カメレオンの的に合わせてくれるまちだと思います。

先述の通り北九州市は人口規模も大きく、食・自然・産業の様々な領域での表現力がとても高い街だと感じています。だからこそ、様々なオーダーに答えることのできるポテンシャルを持っていると考えています。良い意味で「うちのまちはこうでなければならない」というものがないのです。

だからこそ、スタートアップの立場からすれば、とても受け入れてもらいやすいと感じています。それが使い勝手の良さにもつながっているのです。

加えて、行政を挙げて企業側の要望に応じてくれます。だからといって、企業側の言いなりになっているわけでもありません。きっと頼られるのが上手なまちなのではないかと思えます。プル（ひっぱる）型で引き出せば、色々出してくれるのがこの北九州市です。今後も二人三脚で、このまちを盛り上げて行ければと考えています。

29. 下岡 純一郎氏（株式会社クアンド 代表取締役 CEO）

「予測ができない未来の中で、課題先進都市として変化を受け入れつつ、解決していくまちへ。」



下岡 純一郎（しもおか じゅんいちろう）

北九州市出身。

小中高時代はバスケットボールに打ち込み、大学進学を機に福岡市内へ。大学院進学では京都、就職では関西へと移り住み、社会人 2 年目のときにイタリアへ赴任。グローバルプロジェクトで経験を積み、帰国。その後、北九州市で『株式会社クアンド』を起業した。自社開発の『SynQ Remote』は、日本、そして世界の製造現場、建設現場で活用されている。

「育まれた技術、アントレプレナーシップ」

長い時間軸でみると、北九州市が現在のような都市になったことには蓋然性があると思っています。水が豊富で、炭田が近いという地政学的理由から産業が生まれ、高炉の稼働に合わせて 24 時間労働し、それに呼応する形で飲食店などができ、眠らないまちになったという大きな時代の流れに基づいてまちができています。

北九州市の誇る㈱安川電機も鉱山を掘るためのモーターの事業から始まりましたが、その時代ごとの世の中の流れや課題を汲んで産業が生まれ、それらに合わせた技術やアントレプレナーシップが育まれていったと考えます。北九州市は高齢化・人口減少等でネガティブに言われていますが、その課題を解決するために色々な知識や施策が打たれています。課題をネガティブに捉えるのではなく、次世代の事業の種だと捉え、それを新しい産業の推進力に変えていくことが重要だと思っています。

「再び生まれ変わるポテンシャル」

ポスト資本主義の中ではお金がお金を生む一方で、社会や地球が壊されるということが起こっており、「誰が幸せなのだろう」という疑問を皆が持ちつつあります。そのような中で、北九州市こそが次の時代を牽引していく立場

なのではないでしょうか。世の中を変えるビックチェンジを経験してきた北九州市は再び生まれ変わることができると考えています。

文化についても、福岡市はミニ東京のように感じているように感じていますが、北九州市はその方向を目指すべきではないと思います。チェーン店が少ないなど、東京っぽくなく地元根付いた文化があるのは面白い特徴です。その他に東京との違いということでは、産官学が近いということ、地元企業や行政、大学など、立場や領域が異なる人々が越境して繋がり、一緒に企画を立ち上げて、きちんとモノになるといった顔が見えるコミュニティや関係性が北九州市にはあるということです。そこに影響を及ぼし、自分たちでつくっていける楽しいまちだと思います。

私が事業を始めるにあたって北九州市を選んだのも、主流に乗るのではなく、磨けば輝きそうなポテンシャルがある場所が良い、という考えがあったからです。

「空港の活用を」

さらなる北九州市のポテンシャルを磨くためには空港をもっと活用した方が良いと思います。福岡空港は住居エリアが近く、利用時間に制限がある中で、北九州空港は 24 時間使えるという強みをもっと生かしていくべきです。

「ビジョンづくりはブランディングと同じ」

ビジョンづくりはブランディングとも通じるもので、すなわち、北九州市と聞いてどんなイメージが浮かぶか、浮かんで欲しいかを考えることでしょう。人が考えられるキャパシティには限りがあるので、あれもこれもとイメージを詰め込むのではなく、「北九州市」と聞いたときに浮かぶブランドが必要なのではないのでしょうか。

「課題先進地の技術で、世界の課題を解決したい」

当社で提供しているサービスは、現場の労働力不足を補完するものです。建設業における人手不足は起きるべくして起きた問題だと認識しています。人口が縮小していくと建設業は人気なくなっていく傾向にあり、建物の仕事は減っておらず、仕事が増えていく状態にあります。現在は高齢の労働者達が耐えて何とか現場が回っている状況です。これは先進国に共通している典型的な課題であり、これからはアジアなど各国で起こってくる課題と捉えています。現場のオペレーションやきめ細かさといった日本の建設業の強みを生かし、日本人が日本にいながらにして、他国の建築の監理をすることができるようになれば良いと考えています。

「社会で役に立つ教育を」

教育について、どういう人が育つか、どういう都市になるかを決めると考えており、教育は地域にとっても非常に重要だと思っています。これまでのように「一つの正解を見つける」教育ではなく、「自分らしい答え」を子ども達が自ら見つけ、自分たちの未来を変えていけるような教育が必要です。お金・IT・ダイバーシティの教育など、社会で重要となる教育を実施する場があると良いと思います。

「クアンド」という社名の由来は映画監督が撮影を始めるときに放つ「キュー (Q)」の語源

であるラテン語「quando」で、「時」「物事」の始まりを知らせる合図という意味があります。人間の能力は個々人で大差はありませんが、自分が持っている能力に気づかせてくれるきっかけがあるかないかで人生が変わってくると考えています。そういうきっかけになる会社にしていきたいと思っています。

その人の人生を変える「アツ」というものがあるはずで、教育でも同様のことが言えるのではないのでしょうか。マイルストーンを置いていくのではなく、偶発的なものから大きな変化が起きることを踏まえ、そういう気づけるきっかけを都市の中にいかに散りばめられるかが肝心だと思います。

「偶発的に新しいものが生み出される きっかけやポテンシャルがあるまち」

北九州市は、偶発的に新しいものが生み出されるきっかけやポテンシャルがあふれるまちです。今の世の中は予測可能性や計画、戦略といったことが当たり前に使われていますが、未来の都市の有り様は予測できないと考えています。未来が読めない中で、北九州市はありのままに変化していくことを受け入れられるまちだと思っています。

30. 下田 瑞葵氏（福岡県立東筑高等学校）

「北九州市にある柔軟性を活かし、多種多様な幸せの形を叶えられるまちに。」



下田 瑞葵（しもだ みずき）
岡垣町立岡垣東中学校卒業。
福岡県立東筑高等学校卒業。
タイ王国バンコク都との高校生交流事業参加。
第4回九州グローバルユースリーダーズサミット参加。

「環境都市のノウハウで先導するまちに」

歴史の授業で、北九州市の発展の背景には八幡製鉄所や、地元企業の存在がとても大きかったこと。また、経済発展の裏側で公害があり、それらを乗り越えてきたことを学びました。この「逆境を跳ね返す力」があることは北九州市の強みの一つであり、今後の北九州市の発展に欠かせない要素であると考えています。

小中学校の社会科見学で炭鉱や若松の風力発電所などを見てきました。環境に対する取組に積極的なまちだと感じています。環境モデル都市としてのノウハウは、北九州市のみでなく、他の地域や国にレクチャーし、先導していくまちになってほしいです。

「北九州市愛を受け継げる場があれば良い」

北九州市愛を持っている人が市内にたくさんいる一方で、高齢化の問題があり、政令指定都市の中でも高齢化率が高いのが現状です。伝統を受け継いで、「愛」を伝えていくためにも、高齢者との交流できる場や機会を増やしていければ良いのではないのでしょうか。

「北九州市には多様なポテンシャルがある」

自分でも北九州市についてよく知らないなと思い、調べてみました。

生活面において、「次世代育成環境ランキング」で1位を獲得しています。また、小倉の祭りなど、子どもが伝統に触れられる機会があり、子育て世代にとって大きな魅力です。

また、交通面が充実していて買い物に行きやすい、遊びやすいというのも魅力だと思います。黒崎駅は、場所の面から考えても重要な拠点であり、小倉駅のみでなく黒崎駅周辺を発展させることで、福岡市との連携もしやすくなり、北九州市全体の発展にもつながると思います。

経済面でも、工業地帯がありますし、北九州市には人を呼び込むためのポテンシャルがあると思います。

「地理的特徴を活かしグローバルな発展を」

私は、福岡県内で仕事を通じてグローバル化を進めていきたいと思っています。アジアに近く、近隣諸国と連携がとりやすいのも大きなポテンシャルだと思っています。

高校2年生の12月まで英語が苦手でした。地域経済やSDGsに関心があり、タイの高校生と交流して、タイに実際に渡航してみました。同世代の海外の人と話す中で、私が持っていない価値観に触れることができ、その価値観を理解すれば、一緒になって将来の課題を解決できるのではないかと思います。それ以降、英語を学ぶ

ことが楽しくなりました。

北九州市でも、グローバル化を促進する事業を増やして行ってほしいです。

「みんなが幸せになるための取組を」

今後みんなが幸せになるためには、脱炭素化や環境面に配慮した取組を進めていく必要があると思いますし、今後もっと成長していく分野だと考えています。

また、北九州市は高齢化率が高いため、高齢者に向けた講演会といった情報格差をなくすための事業を増やすことも必要だと思います。

「若者が北九州市をもっと知るように」

個人的には、北九州市について知らないことがまだまだ多いと感じました。北九州市に住んでいる友人にも聞いてみましたが、市の現状や取組について詳しく知っている友人は少なかったです。若い世代に、北九州市について伝える授業を増やし、まずは知ってもらうことが重要であると感じています。そして、今後その課題に対して、自分自身が先導して取り組んでいきたいという意識があります。

「北九州市にはのびしろがある」

周りには東京に出ていく人も多く居ますが、東京には興味がありません。完成されたまちだと感じています。アメリカやヨーロッパも発展し切っていると感じるため、アジアに関心があります。日本でも、九州や中国四国地方の方が伸びしろがあるのではないのでしょうか。そういった地域の方が、やりがいがあります。福岡から九州全体を取り込み、西日本全体を発展させていきたいです。

「柔軟に対応でみんなが幸せなまちに」

北九州市には、社会変容に柔軟に対応して、市民が満足して住めるまちになってほしいです。

公害を乗り越え、環境モデル都市になった北九州市には柔軟性があると思います。昔に「できた」のだから、今も「できる」はずだと考えています。

また、高齢者や子育て世代を取り残さないことも重要です。多種多様な幸せの形がありますが、市民がそれぞれに満足できる形を作るべきであり、それを実現できるまちであってほしいです。

3.1. 末吉 興一氏（公益財団法人アジア成長研究所 名誉理事長・元北九州市長）

「感性の新しい人たちとともに、他の都市にはない『北九州市の個性』を伸ばしていく」



末吉 興一（すえよし こういち）

東京大学法学部卒業後、建設省（国土交通省）入省。自治省（総務省）大臣官房地域政策課長、建設省河川局次長、国土庁（国土交通省）土地局長を経て、1987年2月より北九州市長を5期務め、2007年2月退任。現在、公益財団法人アジア成長研究所 名誉理事長。

「広い世界を長い目で見て、しっかりとした議論を」

私は昭和9年生まれ。母方が城野の練兵場で味噌や醤油を商っていた家の生まれでしたので、そこで、私は小倉に縁ができたのです。

幼少期は大分県の竹田で過ごしたのですが、戦時中でもあり、学校に行ったら校舎がないという時代の中、資格さえ取れば、勉強さえすればということ言われていました。そうなると国家試験しかないので、国家公務員試験を受験し、合格しました。

実は私は政治家には望んでなかったわけではありません。「北九州市長にはお前がいい」と、推薦してくれる人がいて、本を読んで勉強すれば良いということでしたので、目的をしっかりと見つけたら、本の内容を覚えることは造作もないことです。ただ体力がなかったし、貧乏にも慣れていました。運が良かっただけです。意外とたくましいところもあるかもしれません。負けてもともと、やってみるかということで、なり手のいないところで立候補することになりました。まさか大都市のトップになるとは思ってもいませんでした。

（市長を務めるなかで）やさしい局面はありません。みんな難しいことばかりです。これは政治家になってみてわかりました。これからは、広い世界を長い目で見てくれる政治家が競争

し合ってほしいと思います。議論倒れになってしまうこともあります。議論はしっかりとした方が良いと思います。

「ルネッサンス構想に込めた思い」

（市長時代の構想である）「北九州市ルネッサンス構想」についてお話しします。厚生年金会館で討論会をやったとき、聴衆（市民）が「ルネッサンスよりアデランスのほうが先！」という発言があり、会場が大爆笑になって、それ以上演説のしようがありませんでした。私は落語が好きなので、「おあとがよろしいようで」ということで、和やかに会を閉じることができました。ヤジを飛ばした男性は私と同年齢でした。後日お詫びに来ましたが、私はむしろ、固い雰囲気（霧）の討論会場を和ませてくれた男性に感謝しました。

「ルネッサンス構想」のネーミングアイデアについては、当初からカタカナを使おうと思っていました。支援者にマスコミ関係の方がいて、固い言葉、四文字熟語（列島改造・所得倍増等）はやめて、カタカナを使おうということになったのです。ルネッサンスには復興、再生という意味があります。構想を作るときは、難しい漢字を使わないようにしようとするタイミングで、時流には乗れたと思います。

マスコミのキャッチフレーズのつくり方を参考にすることが大事だと思います。広告の世界ではキャッチフレーズのつくり方が変遷してきています。悩んだら良いものが出るとは限りません。時代の先端を歩いている人が響くものを作る必要があるのではないのでしょうか。

ただし、一度響いたからといって、それが響き続けることはありません。理屈ではなく、感覚の新しい人に聞いていくことが大切です。政策自体よりも、キャッチフレーズに重心が移っています。新鮮な感じがする、アツと思うようなキャッチフレーズがうけている一方で、有効期間が短いですね。キャッチフレーズは、ムードや地域性が大切だと思います。

「北九州市の個性を伸ばす」

北九州市民に対してはフランクにやったほうが、受けが良いと思います。負けず嫌いなどころもありますがね。

フランクを心掛けたというより、そもそも、私自身がフランクに育ってきた経緯があります。北九州市における地域性や気性があります。建設省に入ったとき、九州だけでなく、よその省庁や、他の地域にも行きましたが、九州には独自の気質があると感じました。

同じ九州でも小倉の根性と、博多の根性は違います。（小倉の根性である）負けず嫌いな根性も大事です。競争というのはそういうものです。

ですので、北九州市の個性を伸ばせば良いでしょう。北九州市の個性とは何か。それを伸ばし、グループの中で飛び出れば良いのではないのでしょうか。一方で、東京と同じことはやれません。北九州市でできることは何か、ということを考えれば良いでしょう。違う個性を伸ばせば良いのです。

よそがやっているから、俺もやろうということは、よくありません。北九州市には他にない特徴がたくさんあるのですから。